

戦後日本語辞書からみた日本社会における社会学の定着について-「社会の経験的なもの」 としての辞書の社会理論的意味-

元武蔵大学 藤田哲司

- 1 目的・方法：「既存の事実連関ないし社会秩序を批判し、新たな社会を構想する『実践としての理論』という社会学理論の役割をいかに果たすかについて問題提起するのが本報告の目的であり、その方法として広辞苑における社会学概念掲載の注目を提案する。
- 2 結果・結論：日本社会の「経験的なもの」として広辞苑に公認された社会学諸概念の記載開始の「起原」とその「自明性の前提」について、専門辞書とのタイムラグ、1度掲載された概念の増減傾向の前提（背景）を明らかにする。

中範囲の理論の問題点は2つある。1 社会のモデル化・内的整合性の最重視（cf. J. ハイグ『理論構築の方法』）、2 その結果として理論の外的（社会的）影響に無自覚。本報告では2に論及する。2とは、現実・既存秩序権威の正統化機能を果たしていることに中範囲理論関係当事者が「無自覚」であるところ。自覚があったとしても「弊害」を科学の名の下に過小評価。社会のミニチュア・経験蓄積モデルとしての国語辞書（広辞苑）とのアナロジー広辞苑は戦後日本社会のミニチュア・概念モデルとみることもできる。社会と中範囲の理論の関係は、戦後日本社会と広辞苑の関係のようなものである。社会的諸経験（概念）の正統化・後追いの“お墨付き”の授与（既存社会秩序の権威づけ）機能→現状の肯定・強化→行き過ぎて（日本）社会の繊維化（肝硬変のような）、冷酷さ・息苦しさにつながっている。決して社会の進むべき濠標にはなり得ない。ではどうすればよいのか？

「経験的なもの（中範囲の理論）」に対する“まなざし”（まずは始原を問う、自明性の前提を問う）という現象学的社会学の試みが、変化の速い「今」、あらためて重要性を増しているのではないだろうか。日本社会の「経験的なもの」の結晶としての『広辞苑』を題材に現象学的社会学の手法を实践したい。社会学概念の広辞苑への記載の「始原」とその「自明性の前提を問う」という“まなざし”を来訪者の皆様と共有したいのである。以下の諸概念を（できるかぎり）検討対象としていきたい。

社会学事項

「国家 国籍 国民 市民 市民権 社会 人種 民族 アノミー 逸脱 イノベーション ウーマンリブ エートス カリスマ 関係 権威主義 行為 コミュニケーション コミュニティ ジェンダー 自己 社会関係資本 社会的事実 宗教 集合表象 制度 他者 犯罪 フェミニズム モラル ラベリング」

社会学人名

「アルチュセール イリイチ ウェーバー ガーフィンケル ギデンズ グールドナー ケインズ ゴフマン コント シュッツ シュンペーター ジンメル スペンサー デュルケム バーガー パーソンズ ハーバーマス バウマン フーコー ブラウ ブルーマー ブルデューフロイト フロム ベック ボードリアール マートン マルクーゼ マルクス マンハイム ミード ルーマン」（ケインズ シュンペーター フロイトは対照のため）